

佐藤みゆき作・小川政弘脚色 「神に届いた祈り」

- 朗読者 (聖書朗読)(詩篇 62:8) 民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。
- 佐藤みゆきナレーション わたしの家はクリスチャンホームでした。特に父は、異教の神々に囲まれて生活しているクリスチャンとして、イエス・キリストに従っていくためには、人間の手で造った神々—偶像に対しては、厳しく闘っていかねばならないという強い信念を持っていました。わたしたち家族も、小さいころから折にふれてはそのように教えられて育ってきました。そんな私に、ある時、自分の信仰を根底から試されるような一つの事件が起こりました。
- 音楽 (ブリッジ)
- 教師 さあ、みんな、今年の林間学校のプログラムが出来上がったぞ。これから配るからよく見とけ。
- 生徒A わあ、やったー。先生、何泊？
- 生徒B どこ行くんですか？
- 生徒C いつですか、先生？
- ナレーション それは、去年の夏、高校1年の時のことでした。もう間もなく夏休みという7月上旬のある日、朝のホームルームで一枚のプリントが配られました。それは学校行事の“林間学校”についてのもので、1年生だけで行われるこの行事には、病気などを除いては絶対参加が原則となっていました。わたしは、期待に胸をドキドキさせながら、プリントをのぞき込みました。
- みゆき(モノローグ) ええと日時は7が21日から23日までで2泊3日。ほかに何も無い時だし、ちょうどいいわ。会場は善行寺宿坊。え、お寺?!
- ナレーション わたしは、一瞬ギクッとしました。その寺は座禅の本山だったのです。案の定、数日後に配られた「林間学校のプログラム」には、毎日座禅の時間と、そのお寺のお坊さんの講話まで組み込んでありました。わたしの学校は別に仏教の学校ではありませんが、道德教育の一環なのでしょう、もう十数年来、そこを使っているとのことでした。
- みゆき(モノローグ) 困ったなあ、どうしよう。お話なんか、何事も勉強だから黙って聞いていてもいいけど、座禅を組んだり、先輩の話だと、みんなお賽銭さいせんを上げたり参拝したりするっていうし…。もしそんなことをしたら…。ほんとにどうしよう。
- ナレーション プリントを読んだ父は、即座に「クリスチャンは偶像礼拝をすることはできません」という理由を添え、“不参加”と書いて学校に提出しました。すぐに、わたしは先生に呼ばれました。
- 教師 ああ君か。こりゃあダメだよ。病気でもないのに、こんなのは理由にならん。もう一度よく考えてきてくれたまえ。
- みゆき でも先生、分かってもらえないかもしれませんが、聖書の神様以外のものを拝むのは、わたしにはできないんです。
- 教師 拝む？ だれも「拝め」と言ってやしないだろう？ ありがたい話を聞いて、精神修養にちょっとの間静かに座っているだけじゃないか。君ね、君もお父さんも信仰熱心なのは分かるけど、あんまり難しく考えないほうがいいんじゃないか？ 大体、自分の信じてる以外のものを、その“偶像”呼ばわりするのは、少し独善的だよ。ともかく、これを認めるわけにはいかないね。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 重い心を抱きながら、わたしは学校を出ました。そして、どうしたらいいかとあれこれ考えているうち、わたしの足は自然に教会に向かっていました。牧師先生は、わたしの話の一部始終を聞き終えると、じっと考えたあとでこう言われました。

牧師 うーん。難しい問題だねえ。考えようによっては、担任の先生の言うように、ささいなことかもしれないけど、でもその小さなことに、真剣に取り組んでいかないと、僕たちの信仰は骨抜きにされてしまう。これは佐藤さんだけじゃなく、日本のクリスチャンすべての問題なんだねえ。——で、佐藤さんは、この林間学校には行きたいの？ 行きたくないの？

みゆき ほんとは生きたいんです。みんなと一緒に旅行するの、すごく楽しいし、いろいろ勉強になるし。でも…。

牧師 うん。でも？

みゆき わたし、みんなと一緒に座禅組んだりしるときに、一人だけ抜けてやらないってことが、できるかどうか自信がないし…。とつても勇気が要ると思うんです。でもそれをやってしまったら、イエス様のみ心を悲しませる罪を犯してしまって、もう自分の信仰がダメになってしまうんじゃないかって不安なんです。

牧師 うん。だれも現実にもその場に立って、「大丈夫だ」なんて言えないよね？ ペテロでさえ失敗したんだから。

みゆき だからいっそ参加しなかったら気が楽なんですけど、学校は絶対ダメだって言うし…。わたし、ほんとにどうしていいか分かりません。

牧師 だから相談に来たんだよね。でも、あなたが素直な心で話してくれたんで、先生うれしかった。特に、あなたが「本当は行きたいんだ」って言ってくれたことね。パウロも言ってるでしょ。クリスチャンが、“あれもダメ、これもダメ”って、自分の信仰を守ることだけに目を向けていたら、この世を飛び出さなきゃならない。否定的、逃避的生き方は、イエス様の喜ばれる生き方じゃないんだよね。だからと言って、なんでもかんでも平気でやっちゃったら、信仰持たない人とまるで変わらなくなっちゃって、信仰は名前だけになってしまう。それは、ご自分の命を捨てて罪を赦してくださった主イエス・キリストの愛を踏みにじることだよ。さあ、そこであなたの場合、どうしたら一番いいのか、佐藤さん、まずイエス様に祈りましょう。

朗読者 神よ。私の祈りを耳に入れ、私の切なる願いから、身を隠さないでください。私に御心を留め、私に答えてください。私は苦しんで、心にうめき、泣きわめいています。(詩篇55:1、2)

ナレーション わたしと一緒に、牧師先生は真剣に祈ってくださいました。わたしは、主は必ず最善の道を示してくださると確信して、心が明るくなりました。そのあとで、牧師先生が提案してくださった方法は、“旅行には参加して、座禅と講話の時間だけ、わたしを自由な時間にしてくれるよう学校側に頼む”ということでした。その間、わたしは静かに聖書を読み、祈るつもりでした。父とも相談して、早速そのように申し込んだのですが——。

教師 佐藤君、君のうちもずいぶん頑固だな。そうやって、団体行動から逃れようとしているんじゃないのか?! そんな自分勝手は許さん！ もし君が参加しなかった場合は、サボリの罰として1週間の停学にするぞ。もう一度考えてこい！ 何が“クリスチャンの良心”だ！

ナレーション けんもほろろでした。わたしは泣きたくなるような思いをこらえて、6時からの教会の早天祈祷会に出て、毎朝祈り続けました。「神様は最善をなさる」と何度も何度も自分に言い聞かせながら。教会の皆さんも、心を合わせて祈ってくださいました。

教会員A 神様、佐藤さんを助けてください。

教会員B 主よ、どうぞあなたの方で、この闘いに打ち勝つことができますように。

教会員C イエス様、あなたが佐藤さんと共にいてください。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション けれども、なんの変化も起こらずにさらに数日が過ぎ、学校側がもうこれ以上待てないという日がやってきました。

教師 その日は土曜日でした。担任の先生が午後のホームルームに遅れて入ってくると――。

ナレーション みんな、遅れてすまん。全く厄介な電話がかかってきてな。お前らの父兄の中にも相当な分からず屋がいるなあ。「これから談判に参ります」とよ！

ナレーション それが父からの電話だと、わたしはすぐに分かりました。その午後、父と牧師先生と、担任の先生と学年主任の先生の 4 人で話し合いが始まりました。その担任の先生は倫理社会の先生でしたので、聖書やキリスト教についてもかなりの知識を持っていました。あとで父や牧師先生に聞きましたら、そのような信仰の本質的な問題まで突っ込んだ、それは激しい、熱のこもった話し合いが続いたとのこと。その間、わたしは教会にいて、牧師先生の奥様に一緒に祈っていただきました。とても独りで家で待つなどいられなかったのです。

牧師夫人 みゆきさん、大丈夫よ。神様は決して悪いようにはなさないわ。あなたは正しいことをしてるんですもの。勇気を出してね！

みゆき でも先生、担任の先生はとっても頑固だし、聖書のことも知ってるし、もしうまくいかなかったら、わたし、わたし…。(ワッと泣きだし、しばらくおえつ)

ナレーション そこへ、電話がかかってきました。父からでした。長時間の話し合いの末、学校側が折れて、こちらの申し入れ通りにしてくれることになったのです。父の声は静かでしたが、喜びに震えていました。わたしは一瞬頭がボーっとして、夢を見ているようでしたが、心の中で、み言葉を繰り返し繰り返し繰り返しかみ締めていたのです。

朗読者 (詩篇 55:22) あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさない。

<完>